

### 日向 祥子（ひゅうが しょうこ）

【主要担当科目】日本経済史

【現在の研究テーマ】生産産直事業の展開

【新入生へのメッセージ】

皆さんの「大学生生活でやりたいことリスト」に読書を加えていただけたらと思います。本は「自分が知りたいこと」をピンポイントで教えてはくれない、素晴らしい媒体です。目次や著者名で見当をつけ、「自分が知りたいこと」を「含んだ」様々な本を渉猟してゆく過程は「自らよく考えること」を不可避的に（！）伴います。その経験は、コンテンツそのものを超えて、論理的思考力や建設的批判能力までも与えてくれることではないでしょうか。



### 平口 良司（ひらぐち りょうじ）

【主要担当科目】ミクロ経済学・マクロ経済学

【現在の研究テーマ】経済成長論

【新入生へのメッセージ】

入学おめでとうございます。大学の4年間では勉強したり、友人関係を深めたり、部活動を頑張ったり、本当にいろいろなことをすることができます。ただ、この4年間は長いようでいて、案にあっという間に過ぎ去ってしまうものです。私自身はそのことをあまり意識せず過ごしてしまっただために、今になって後悔していることがいくつもあります。上手に計画をたてるなどして、有意義な学生生活を送ってください。



### 藤本 穂彦（ふじもと ときひこ）

【主要担当科目】食料経済学

【現在の研究テーマ】食と農のまちづくり、食と農の倫理

【新入生へのメッセージ】

経験は大事だ。旅は人生を豊かにしてくれる。出会いこそが人生さ。4年間の自由な時間を、興味の赴くままに過ごすことができる、その入り口に立つ皆さんはきっとこんな言葉を奉ねることでしょう。では、なにをどのように経験するとよいのか。よい経験をするにはセンスがいります。感情を捉えたり、世界の見方を変えたり、見えないものを見るところというセンス。「経験する」ことに注目して、そのセンスを磨くヒントを紹介します。



### 盛本 圭一（もりもと けいいち）

【主要担当科目】経済変動論

【現在の研究テーマ】法人税のマクロ経済分析、金融政策

委員会の制度設計

【新入生へのメッセージ】

大学時代の4年間は、長いようで短いです。取り組むべきことはいくつもあるのですが、その中で優先順位が高いことは、読書力を鍛えるでしょう。易しいものを多読する一方、難しいものを時には一行に何時間もかけて読み込んでください。これは今しかできないでしょう。その価値は、早ければ十年後には分かれます。歳をとるのは、あっという間です。後悔しないで済むよう、今すぐ始めましょう。



## 社会的共通資本論、 宇沢弘文の生き方としての経済学

藤本 穰彦

2022年4月、明治大学のキャンパスに学生たちが戻ってきました。膝をつき合わせ、言葉を交わし、思考を深める、探究する。その機会が開放されたのである。リバイタワール。ぎゅうぎゅうのエレベーターに乗って、教室へ向かう。満席、抽選。ざわつきの中にそっと声を落とし、講義をスタートさせる。そのままわたしは、学生たちの熱気につり込まれていった。

15年以上前になるけれど、わたしは同志社大学文学部で学んでいた。京都御所に隣接した今出川校地は、都市的な緑のなかに美しく機能的にレイアウトされており、講義の合間など、学生も教員も皆が一度同じ道に出てきて、自由なひと時を過ごしてはまた、次の目的地へと動いていく。その集合と離散の運動のなかに、赤いベレー帽をかぶり、長く白い顎鬚をゆったりと蓄えた老齢の知識人が、静かに歩み去っていく。経済学者の宇沢弘文先生である。

当時、同志社大学に招かれた宇沢先生は、社会的共通資本研究センターを主宰されていた。その圧倒的な、しかし威圧的というわけではない、不思議な存在感に惹かれて、わたしはセンターの講義やセミナーに願を出していた。宇沢先生は、話を始めるや眼光鋭く、しかし声は穏やかに、

185

わたしたち学生に伝えるべきこと一つひとつに魂を充填して、言葉を繋いでいた。あどとき、チャペルの柔らかな光のなかで、わたしはなにを愛取っていたのか。

### 1. 「社会的共通資本」(宇沢弘文、2000年、岩波新書)

ケネス・ジョセフ・アローの下で頭角を現した宇沢(以下、敬称略)は、若くしてシカゴ大学の正教員となり、主流派経済学を中心にいた。その後宇沢は、現実の社会問題と正面から格闘するなかで、効率性からの立論を基礎とする新古典派経済学における社会的正義の欠如を批判する立場をとった。「すべての人々の人間の尊厳と魂の自立が守られ、市民の基本的権利が最大限に確保できるという、本来的な意味でのリベラリズムの理想が実現される社会」(宇沢、2000:p.3)を「ゆたかな社会」として、その実現はいかんにして可能かを問うた。「ゆたかな社会」の経済体制と社会制度はどのような性質をもったものか。その具現化のためにどのようなイメージをもてばよいのか。その応答として練り上げられたのが、「社会的共通資本」(Social Common Capital)という考え方である。

宇沢は、社会的共通資本を以下のように表現する。

「社会的共通資本は、たとえ私有ないしは私的管理が認められていようような希少資源から構成されていたとしても、社会全体にとって共通の財産として、社会的な基準にしたがって管理・運営される。社会的共通資本はこのように、純粹な意味における私的な資本ないしは希少資源と対置されるが、その具体的な構成は先験的あるいは

186

論理的基準にしたがって決められるものではなく、あくまでも、それぞれがそれぞれの国の自然の自然的、歴史的、文化的、社会的、経済的、技術的諸要因に依存して、政治的なプロセスを経て決められるものである。」(宇沢、2000：p. 4)

社会的共通資本とは、自然資本（大気、水、森、川、湖沼、海岸、土など）、社会資本（道路、上下水道、電力・ガス、交通機関など）、制度資本（教育、医療、金融、司法、行政、出版、言語、文化、都市、農村など）から成る、その社会全体にとっての共通財産である。

その「社会的なもの」の意味内容は、それぞれの国や地域の個性的な文脈にそって表出し、民主的に合意される。社会的共通資本から生み出されるサービスは、市場の基準によって分配されるのではなく、「市民の基本的権利の充足という点でどのような役割、機能を果たしているか」(宇沢、2000：p. 22) という「社会的な基準」にしたがって分配される。

宇沢によれば、「社会的共通資本は全体としてみると、広い意味での環境を意味する。社会的共通資本のネットワークのなかで、各経済主体が自由に行動し、生産を営むことになるわけである。市場経済制度のパフォーマンスも、どのような社会的共通資本の編成のもとで機能しているかということによって影響を受ける」(宇沢、2000：p. 22)。つまり、それぞれの社会的共通資本が安定的に維持・管理され、その資本から得られるサービスが社会正義に合ったかたちで、市民一人ひとりに分配される「制度」をいかに実現するかが課題となる。

## 2. 『始まっている未来——新しい経済学は可能か』

(宇沢弘文・内橋克人、2009年、岩波書店)

「制度」について考えるために、社会的共通資本としての「農村」についてみていこう。「農の営みが、人類の歴史でおそらくとも重要な契機をつくってきたものであり、将来もまた基幹的な地位を占めつづけることは間違いないであろう」(宇沢・内橋、2009：p. 174)として、宇沢は次のように述べる。

「農の営みは、人間が生きてゆくために不可欠な食料を生産し、衣と住について、その基礎的な原材料を供給し、さらに、山、森、川、湖沼、海、土壌のなかに生存しつづける多様な生物種を守りつづけてきた。農の営みは、自然環境をはじめとする多様な社会的共通資本を持続的に維持しながら、人類が生産するためのにもっとも大切な食料を生産し、農村と言う社会的な場を中心として、自然と人間との調和的な関わり方を可能にし、文化の基礎をつくり出してきた。このような意味で、農村自体もまた一つの重要な社会的共通資本である。」(宇沢・内橋、2009：p. 174)

社会的共通資本論の卓見の一つは、自然、自然環境に「自然資本」として明確な位置づけを与えたことである。また宇沢にとって、「自然」と「文化」は一体のものであった。「ある一つの社会において、自然とみなされているものが、他の社会では『文化』と考えられる」(宇沢、2000：p. 211)。

を基本とした「農社」を興そうとしていた。このアイデアは、宇沢の成田での経験に根ざしたものであった。

「成田空港周辺地域は一見、農業的基盤の崩壊、地域経済の劇的な転換という形でとらえられているように思われる。しかしひとたび、その内部に足を踏み入れるとき、まったく異なった状況が展開されつつあることがわかる。この、新しい状況を担っているのは、反対同盟の農民たちと、この地に定住して協同作業に従事している支援に集ったかつての青年たちである。これらの人々は、25年の風雪に耐えて、思想的にも、人間的にも大きく成長し、この地域がおかれた状況を的確に認識し、新しい展開をもとめて苦闘をつづけている。これらの人々はすでに不惑を越えて、それぞれ一家をなしているが、ゆたかな人間性、深い洞察力をもった人々の集団が、この成田闘争の長い歴史のなかから生み出されていて、新しい展開を求めて力づくで動きはじめている。この人たちのアスピレーションと希望が現実のものとなるような形で成田空港問題が解決できたらという思いを抱くのは筆者（宇沢）だけではないであろう。」（宇沢、1992：p. 32-33）

そのために「一応の解決をみたした後も、私（宇沢）は支援者たちの生きざまを全うする道として新たな共同体を成田につくろうとしました。かれらには共同体という言葉に拒否感があるので、私はそれを『三里塚農社』と名付けました」（宇沢・内橋、2009：p. 135）。このように宇沢は、社会的共通資本としての農村のかたちをつくろうとしていた。

「伝統的社会の文化は、地域の自然環境のエコロジカルな諸条件にかんして、くわしい深い知識をもち、エコ・システムが持続的に維持できるように、その自然資源の利用にかんする社会的規範をつくり出してきた。自然資源の利用にかんして、長い、歴史的な経験を通じて知識が形成され、世代からつぎの世代に継承されていった。自然環境にかんする知識と、その世代間を通ずる伝達によって、文化が形成されると同時に、文化によって新しい知識が創造されてゆく。何世代も通じて知識が伝達されてゆくプロセスで、社会的制度がつくり出される。そして、日常的ないし慣行的な生き方が、社会的制度として確立し、一つの文化を形成することになる。」（宇沢、2000：p. 211-212）

宇沢は、アダム・スミスの『国富論』に立ち返りながら、「自然と、そこに住み、生活している人々の総体をとらえたNation（国家）」の根本として、社会的共通資本としての農村の重要性を論じている（宇沢・内橋、2009：p. 133）。また農業においてこそ、「そこに働く人々が、自らの人格的同一性を維持しながら、自然のなかで自由に生きることが可能となる」（宇沢、2000：p. 49）という。「農の営みもあり、自分の志を貫く生き方もあります。それらを社会が支えてきたのが昔の農村の根本でした」（宇沢・内橋、2009：p. 123）、とも。

### 3. 『成田』とは何か——戦後日本の悲劇』

（宇沢弘文、1992、岩波書店）

社会的共通資本としての農村を再構成するために、宇沢は、農の営み

残念ながら、この「三里塚農社」は上手く立ち上がらなかったようだ(宇沢・内橋、2009・p. 135)。ただし、「成田」とは何か(宇沢、1992)を手にとれば、宇沢が出会い、対話した成田の人々の生活世界と思想的基盤の在り処を今でも知ることができる。では、宇沢の「農社」の理想を生かし直し、農の営みの復興と社会的共通資本としての農村をいかにして再構成するか。

果たしてわたしたちは、宇沢の生き方としての経済学からあの時手渡されていた「問い」に、直面することになったのである。

#### ■藤本穠彦先生 紹介書籍

##### 1. 『社会的共通資本』

(宇沢弘文、2000年、岩波新書)

- 序章 ゆたかな社会とは
- 第1章 社会的共通資本の考え方
- 第2章 農業と農村
- 第3章 都市を考える
- 第4章 学校教育を考える
- 第5章 社会的共通資本としての医療
- 第6章 社会的共通資本としての金融制度
- 第7章 地球環境



##### 2. 『始まっている未来——新しい経済学は可能か』

(宇沢弘文・内橋克人、2009年、岩波書店)

- 第1回 市場原理主義というゴスベル
- 第2回 日本の危機はなぜこころも深いのか
- 第3回 人間らしく生きるための経済学へ
- 第4回 新しい経済学の息吹
- 補論1 社会的共通資本としての農の営み
- 農業と食料の危機にどう対応すべきか
- 補論2 社会的共通資本と21世紀的課題



### 3. 『成田』とは何か——戦後日本の悲劇』

(宇沢弘文、1992、岩波書店)

- 第1章 空港の社会的費用
- 第2章 成田闘争の軌跡 (1)
- 第3章 成田闘争の軌跡 (2)
- 第4章 成田闘争の軌跡 (3)
- 第5章 成田闘争の軌跡 (4)
- 第6章 成田闘争の軌跡 (5)
- 第7章 「徳政をもって一新を發せ」

